HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歴史の講義 カッター教授による 内田 瀞 札幌農学校1878年10月5日
Author(s)	松本, 明
Citation	北方人文研究, 17, 57-84
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92167
Type	bulletin (article)
File Information	17_04_Matsumoto.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［資料］

歴史の講義　カッター教授による　内田　瀞
札幌農学校 1878 年 10 月 5 日

松本　明
（北海道大学大学院文学院人文学専攻修士課程修了、修士（文学））

要旨

本稿は札幌農学校のお雇い外国人教師、カッター（John Clarence Cutter 1851～1909）によって 1878 年に行われた世界史（万国史）講義の日本語訳である。史料は北海道博物館所蔵の内田家資料を使用した。札幌農学校の一期生内田瀞（うちだきよし）がカッターの講義を筆記したノート（全文英文筆記体）を翻刻しそれを翻訳したものである。

1878 年に着任したカッターは本来内科医であり、生理学や動物学を主として講義したが、英文学の講義も担当した。開学した頃の札幌農学校はクラークがマサチューセッツ農科大学を範としてカリキュラムを作成したために、農学等の実学系科目だけに留まらずリベラルアーツ系の科目も多数講義されていた。カッターは札幌農学校のリベラルアーツ教育に中心的な役割を果たした。

この世界史講義は英文学講義の前段として行われ、英文学史を理解するために必要な欧米の歴史、特にキリスト教の生成発展を軸としたヨーロッパ史を講義している。英学史の研究者によってカッターの英文学講義は断片的にではあるがその内容が研究され明らかにされてきた。しかし、その助走として行われた世界史講義の内容を全文翻訳して明らかにしたのはこれが初めてである。カッターの世界史講義の特徴を整理すると以下のようになる。

①キリスト教誕生以後の歴史を扱い、１世紀から 18 世紀末までを１世紀ごとに区切って講義している。通底しているのはキリスト教の生成発展を中心としたヨーロッパ史である。

②政治史的に重要な人物も登場するが、キリスト教の発展や伝播、受容（国教化）、イスラム教の侵略からキリスト教を守った事績などに関わる人物が多数取り上げられている。また、それほど詳しくないが重要な戦いも多く取り上げられている。

③日本で外国人によって行われた最初期の世界史講義で、現在のように世界史の流れを括る史観があってそれによって時代を区分したり、人物、歴史事象を説明したりしているわけではない。

④現在の高校世界史教科書にも登場しないような人物、事項が半数以上を占め、大学の教養課程にふさわしいかなり高度な内容である。

以下、筆記ノートの翻訳である。理解するには訳注が必要な人物名や歴史事象が多数あるが、それは付けず、そのままノートに筆記された形で紹介する。

1 世紀

ローマの皇帝　　紀元後

アウグスチヌス・カエサル

14 年　ティベリウス

37 年　カリギュラ

41 年　クラウディウス

54 年　ネロ

69 年　ウェスパシアヌス

79 年　ティトゥス

81 年　ドミティアヌス

98 年　トラヤヌス

文人・作家

リヴィウス

オウィディウス

ストラボン

セネカ

キリスト教教父

聖バルナバ

クレメンス

聖イレナオ（エイレナイオス）

聖ポリュカルポス

HIS（Jesus Hominum Salvator）　人類の救い主　イエス

1 世紀　悪皇帝

全ての歴史は幾人かの勇敢で熱心な人物の伝記が中心となる状態に容易に陥る。19 世紀は発明の世紀である。一つの点で、全ての過ぎ去った世紀の歴史は似ている。それは、彼等歴史上の人物が、この 19 世紀を作り上げるのに、各々の役割を果たしてきたということである。それぞれの世紀にはそれぞれに優勢な思想があったが、それまでの全ての文明社会を通じてそのような思想があったのはローマ帝国だけだった。

しかし、イエス・キリストの誕生によって、世界史全体の流れは変わった。大国は小国となり、小国は大国となった。ローマ自身も世界の首都ではなくなった。（イエスの）素晴らしい物語が知られるようになると人類の心と目は、エルサレムに向けられた。

ティベリウスは安定と漸進によってそれまでの世界で最も恐ろしい専制国家を築き上げた。この時期の世界の歴史、それもかなり長い時代が、次々と帝位についたローマの支配者たちの行為と気質によるものであると省察することは屈辱的である。ティベリウスはローマ帝国を使いつくしたが、彼自身に権威と影響力を超えるものはなかった。この世紀の 44 年、治世の 3 年目にクラウディウス帝は強力な軍隊の長としてイギリスに上陸した。勝利と定住の潮流ははるか北のソルウェイまでのイギリス全土が金鷲、つまりローマ軍の旗に服従するまで鎮まらなかった。ローマの中央権力と遠い辺境にいる将校たちとの不一致は長い間続いたが、それは帝国の歴史の中で著しく最悪な状

況だった。

ネロは暴君だったが、最初からそうではなかった。明るい日の出であったものがあのような酷いコースを取り、暗く没したことはそれまでになかった。恐れに悩まされ、後悔の念と恐怖に遠吠えし、彼は自身のその臆病な手が下すことのできなかった処罰のために、部下の兵に引け目を負い、全ての皇帝の中で最も卑しく、低劣で無慈悲な死を遂げた。

70 年に、エルサレムは占拠され、破壊された。我々に残されたこの攻城戦の記録は、恐怖の点において他のどの悲惨な事件の記録をも超える。飢餓とペストが襲来したが、礼拝所の狂信的な信者たちは籠城すると決意した。11000 人が死んだ。

2 世紀　ローマの皇帝

トラヤヌス
117 年　ハドリアヌス
138 年　アントニヌス　ピウス
161 年　マルクス・アウレリウス
180 年　コンモドゥス
193 年　セプティミウス

称賛された者
小プリニウス
プルターク
ユウェナリス
プトレマイオス
パウサニアス
ガレノス
アッピアノス
アテネのアテナゴラス
マルシオン
アレクサンドリアの聖クレメンス

2 世紀　賢帝

ローマ帝国の中心的な権力は依然としてローマにあった。中央の権力への依存は至る所に存在したが、この時の中央の権力は慈悲深く、賢明だった。この時期以後、皇帝の世襲は行われなくなることを我々は発見するだろう。

この世紀の 3 年目、ローマ人の新しい主人はトラヤヌス帝だった。彼の生まれはスペイン人だが、ローマ軍の中で最良の将軍だった。その日より 80 年後帝国は休息する。世界は抑圧に余りに慣れ過ぎていたため、その時起こった変化に驚いたように思われた。しかし、人民のために全てのことをする政府は、人民を国家のために仕事をすることができないようにしてしまった。彼が戦争で勝利したことは実を結ばなかった。彼は以後ずっと新しい属州をローマに付け加えはしなかったが、今でも光る彼の栄光は国内行政の優秀さに起因する。

しかし、ハドリアヌスは、帝国は既に十分すぎる程大きいと信じた。彼はローマ軍を属州の中心

部から撤退させ、防禦するのが容易な自然の国境内で満足した。しかし、その国境内で彼の軍事行動は先例がなく、以来王のそのような行動を称揚した王国はない。彼の才能はあらゆる分野に及んでいた。彼はあらゆる物を読み、何も忘れなかった。彼は音楽家であり、詩人、哲学者だった。医学を学び、法律を学んだ。彼は厳格で公正であり、彼の時代以上にローマの規律が厳しかったことはない。

トラヤヌス大帝は賢帝の一人でもあったが酒飲みだった。ハドリアヌスは五賢帝の中では最悪だった。彼は人間生活に関心がなかった。どのような小さな違反でも人々を死刑に処した。

アントニウス・ピウスの名声はそれまでのローマの影響が及ぶ範囲を遥かに超えて伸びていた。ひとりの偉大な人物の決定はインダス川の河岸にまで平和をもたらした。イギリスは騒擾の中にあった。ライン川河岸とアルメニアに騒動があった。パルティア人がローマの領域を寸断したが、ローマ帝国に災厄が降りかかったことはなかった。

賢明なマルクス・アウレリウスの死によって、黄金時代は終焉を迎えた。コンモドスが帝位につき、前世紀の狂気じみた残虐行為を再び繰り返した。

ネロはコンモドスよりは残酷でなかった。ドミティアヌスは人間の命に対してそれほど無謀ではなかった。彼はローマ全市を血で汚し、殺人の許可権を売ることで金儲けをした。軍事的独裁者の永続的な極限は、「軍人には寛容であれ、そしてあらゆる側面を踏みにじる」だった。

3 世紀

この世紀の 22 人の皇帝

セプティニウス・セウェルス

211 年　カラカラ

222 年　アレクサンデル・セウェルス

235 年　マキシミヌス（6 度目の迫害）

249 年　デキウス（7 度目の迫害）

254 年　ヴァレリアヌス（8 度目の迫害）

270 年　アウレリアヌス（9 度目の迫害）

277 年　プロブス

284 年　ディオクレティアヌス

文人・作家たち

アレクサンドリアのクレメンス

オリゲノス

ロングリマス

聖キプリアヌス

聖ケルスス

ジュリアス・アフリカナス

3 世紀　無政府状態と混乱　キリスト教会の成長

ローマ政府の経営組織が、この世紀、文明的な生活に第一に必要とされる物資の確保において正常に機能していなかったという証拠が得られている。文明と野蛮の真の区別は、文明が公正で適切

に運用される法の保護の下にある社会状態なのに対して、野蛮はそれが凶暴な政府の偶然性に委ねられていることである。

アレクサンデル・セウェルスが今、皇帝位にある。彼の最も高貴な感情は、母から受けたキリスト教の教えに由来するが、彼の母はキリスト教の教義を教えることを排除しなかった。しかし、法が複雑になりすぎることは国の衰退に繋がる。ローマ帝国の名は、マキシミヌスの即位によって実にその権威の全てを失った。253 年、ヴァレリアヌスが即位したが、彼がその当時最も高潔で見識のある皇帝であることは全ての方面の学者たちが認めている。ローマ帝国がその後支えきれず、大きく零落していく責は彼に帰せられる。彼はペルシアの王、シャープールに幽閉された。

ここにプロブス帝が登場する。彼の人生と行動はその名と釣り合っている。ディオクレティアヌスは彼が考える、帝国で最強の組織の支持を確保しようと決意した。彼はキリスト教徒がそれ迄受けた多くの迫害の中で最も過酷な迫害をしたことで神官たちを満足させた。彼は帝国の課題を脇に置くことを決心し、私的な生活に引退した。この世紀の特徴はその酷い混乱と秩序への希求である。もはやローマには、それが共通の中心となって全てが展開する、ローマ人の心性の連帯がなかった。暴君と権力闘争に明け暮れる競争者が帝国のどの地域にもいた。安定した権威、政府、安全がなかった。

生活の全ての規則が緩んだこの只中に、確実にしかし気づかれずに、キリスト教会は成長した。この市民国家のまさにその無力さから強さを引き出し、信者に秩序と法の恩恵を確立し信者を増やすため自己を防衛しなければならなかった。多くの皇帝の治世下でキリスト教は迫害された。多くの使徒たちは耐え難い苦しみに満ちた死に処され、財産は没収された。しかしまさにその時、その内部の成長が増進し、強化された。その事実から次の諺が生まれた。

「殉教者の血は教会の種である」

この時期から後、1 世紀（百年）はそれ自身がローマとの繋がりにおいて魅力を発するようになると考えることは愉快である。1 世紀には悪皇帝たちがその残酷さと奢侈でローマの強さを損ねていた。2 世紀には賢帝たちがその寛容で保護的な政策を実行して帝国を軟弱化、無気力化させた。3 世紀は、人々を等しく自分たち自身を防禦することができなくさせ、国家の防禦システムを外国人兵の刀剣に委ね、野蛮な民族の侵入によって強襲され虐殺されるという三つの事柄が同時に起こりローマの力は内部から崩壊した。

宗教は連帯ではなく分断の原因だった。国家の連合体である事、言語とその使用法、慣習がその一体性を失い、この世紀の終わりには、幾人かの偉大な為政者や過去の名声の記憶以外、完全な荒廃から保存すべき何者も残っていなかった。

4 世紀

ローマ皇帝

304　コンスタンチヌス

305　マキシマス

306　コンスタンチヌス

337　コンスタンチヌス二世

361　背教者ユリアヌス

363　ヨヴィアヌス

西ローマ帝国
364　ヴァレリアヌス
375　ヴァレリアヌス2世
395　ホノリウス

東ローマ帝国（コンスタンチノープル）
364　ヴァレンス
379　テオドシウス

文人
アテナイオス
クラウディアヌス
エウゼビオス
アリウス
聖バシレイオス
聖アンブローズ
聖アウグスティヌス
聖マルティヌス

4世紀　コンスタンチノープルへ遷都―キリスト教の確立―ユリアヌス帝の背教

ゴート人の移住

古いローマの自由の記憶が消滅すると、仰々しい東方の専制国家にローマのそれに近いアプローチが取られた。270年に即位したアウレリアヌスは頭を王冠で飾った初めての皇帝だった。284年即位のディオクレティアヌスはアジアで最も豪華な王国に彼の宮廷を形成した。コンスタンチヌス帝は競争者との多くの闘争の後、単独の権威を確立し、帝国の首都をローマからヨーロッパの果ての地であり、アジアとは狭い海峡で隔てられるだけの都市へ移した。329年コンスタンチノープルに王座は移された。多神教の礼拝所はどこにもなく、神々の像はローマに取り残された。廃棄された文書の孤独の中に。というのもコンスタンチヌス帝は、首都はその創設の始めからキリスト教徒の住むところと決めていたからである。教会が建てられ、聖職者が任命された。皇帝は彼の精鋭の兵たちを、蛮族の侵入を監視していた海岸から撤退させた。そして、兵たちを小さな部隊に分かち、街に駐屯させることで、彼らの士気をほとんど全て喪失させた。

コンスタンチヌス帝の治世の時、帝国の歳入は通常毎年2億ドルと計算されてきた。コンスタンチヌス帝はどちらの党、利己的なクリスチャン、有罪になったクリスチャンとも交流をもった偉大な政治家である。ギリシア教会に従属したことが彼を聖なる目撃者に祭り上げたのは残念である。我々はキリスト教徒によって、皇帝が恐ろしい罪悪を犯した後で、それが異教徒も罪の償いができる権利が異教徒の教会にも適用できることをこれらの間違った神々も御利益があることを広めてしまったことを。“このような行いは浄化できない”しかし、キリスト教会の恩人に何物も拒むことはできない。

325年のニケーアの勅令はいまだにキリスト教国の象徴である。

360年　世界は皇帝自身が、若く意気軒高なユリアヌスが、古い哲学と古代の神々の信奉者と知って驚いた。彼自身の性格は間然する所がなかった。彼の学習歴と才能について批判される点は全くなかった。論争における雄弁さはアテネで教育を受けた時に大いに伸びた。

皇帝ユリアヌスは落ちぶれた神々を再び拾い上げた。彼はキリスト教徒を火と剣ではなく侮蔑で迫害した。彼は軽蔑したが寛容でもあった。彼は中庸、自己否定、生命の清浄を説教しこれらすべ

ての徳を、知られない程度に王座において実践した。

ローマ帝国の東と西への分離は 364 年に起きた。それ以降歴史は二つのはっきりした、しかも徐々に多様化する海峡に流れていく。この世紀は権力の座をコンスタンチノープルへ移したことと多神教主義からの回復を企図したことにより特徴づけられる。今ここにきて我々は 3 世紀最大の事件、ゴート人の侵入と最終的にこの敵対的な兵たちがローマ帝国内に定住することについて考察する。

ゴート人とローマ人のアドリアノープルの戦いは 379 年に起こった。この戦いでローマ人はコンスタンチノープルまで進撃した蛮族を破った。

彼等ゴート人は貢物を支払うことでコンスタンチノープルから撤退することに同意し、ローマ帝国軍に兵として入った。ゴート人の長はアラリックで、ゴート人のリーダーの子孫であり、彼自身勇敢な軍人だった。

5 世紀

西ローマ帝国皇帝
424　ホノリウス
424　ヴァレリアヌス 3 世
461　セベリウス　ネポス
474　ユリウス
475　アウグスツゥルス

東ローマ帝国皇帝
408　テオドシウス
457　レオ大王
491　アナスタチウス
フランクの王
クロービス
イタリアの王
テオドリック

文人・作家
ヨハネス・クリュソストモス
聖ヒエロニムス
アウグスティヌス
ペラギウス
キュリロス

五世紀―ローマ帝国の終焉―新しい国家の形成―キリスト教権威の成長

404 年―テレマクスが剣闘士の試合を止めさせる― 410 年―アラリックローマ劫略― 449 年―サクソン人がグレートブリテン島を占領―紀元前 220 年―秦帝国建国万里の長城建設― 451 年―アッチラ大王シャロンの戦いで王の連合軍に破れる― 452 年―ベネチア建国― 455 年―バンダル人の王カイゼリック、ローマ略奪― 457 年―西ローマ帝国アウグスティヌス皇帝の時滅亡― 481 年―クロービス、メロビング朝を開く

スティリコ　ローマ唯一の希望、は彼の皇帝の命で暗殺される。アラリックは再びイタリアを彼の掌中に収める。どのような名、種族であれ、蛮族は皇帝ホノリウスが彼らの殲滅を命じたので、彼らの王のもとから進軍した。

6 日間、ローマ市内は殺戮と略奪のほしいままになった。フン族のアッチラは虐殺王と呼ばれたが、東から進軍してフランスに侵入し、オルレアンを包囲し、そこで退却して決戦の地を選んだ。

そこはシャロンから遠くない広大な平野で、そこでの戦いはその後の世界の運命を決めた。そこではフランスとイタリアができうる限り募兵した軍のほとんどが虐殺された。

西ゴート族、フランク族、サクソン人、ブルグンド人たちは自分たちのリーダーの支配下にあった。その戦いは二つの対立する民族が直接対決し、その結果によってヨーロッパがカロリング朝に支配されるか、それともゴート人やゲルマン人の王の下で自由に発展できるかを決める戦いであった。三十万の死骸が戦いの激しさを示すが、西（フランス、ゲルマン、スペイン）が勝利した。

455 年、カイゼリックに率いられたバンダル人がアフリカから海を渡り、破壊のための破壊を行い、そしてそのような激しい、野蛮な破壊行為に「バンダリズム」の名がついた。14 日間、略奪者はローマで略奪を働いたが､略奪される価値のあるものがほとんど残ったことだけは不思議である。

476 年、ローマは滅亡した。この崩壊の原因は明らかに三つ数えられる。

1．ローマ人が野蛮で自己中心であったこと

2．首都の収入減がなくなったこと

3．多様な帝国各地を一つにつなぎ団結させる何かしらの影響力の欠乏

残酷で、堕落し、唯一神を信じない人々！この人たちこそが世界をその軍事力によって奴隷化し、そこに彼らの文明を植え付け、堕落させたローマ人である。

キリスト教の教えはこの人々によって放擲されてきた。彼らの美徳、危険を顧みないこと、揺るがない決心、簡素な生活は終わった。

ラテン教父	ギリシア教父
聖ジェローム	聖アタナシウス
聖グレゴリウス	聖バシレイオス
聖アンブローズ	聖クリュソストモス
聖アウグスティヌス	ナジアンゾスのグレゴリオス

クリーシーの世界 16 大決戦

490BC：ダリウス大王　マラソンの戦いでギリシア軍に敗れる

413BC：シラキュースの戦い　スパルタ人によってシラキュース占領される

331BC：アルベラの戦い（ガウガメラの戦い）アレキサンダー大王ダリウスを破る。

207BC：カルタゴ、メタウルスの戦いでローマに破れ、その後滅亡

9AD：リッペの戦い　アルミニウス、ローマ軍に勝ち、ゲルマン部族の独立を確保

451AD：シャロンの戦い、アッチラ大王、アエチウスに破れる

732AD：ツール・ポアチエの戦い、マルテル　アラビア軍を破り進軍を阻止

841AD：フォントノアの戦い、ブルゴーニュのシャルル王　ロタールを破り、フランスとドイツの統合を阻止

1066：ヘイスティングの戦い。ノルマン人ウィリアム王、イギリスを征服

1469：オルレアンの戦い。ジャンヌダルク、イギリス軍を破る。

1588：イギリス海軍、スペイン無敵艦隊を破る。

1704：ブレンハイムの戦い。イギリスのマルバラ公、フランス軍を破る。

1709：ポルタバの戦い。スウェーデン王カール 12 世、ロシアのピョートル大帝を破る。

1777：サラトガの戦い。バーゴイン将軍、ゲイツ将軍に降伏。

1792：バルミーの戦い。プロシア軍とオーストリア軍、フランス共和国軍に破れる。
1815：ワーテルローの戦い。ナポレオン、ウェリントンに破れる。

キリスト教会の成長

ゴート人は荒野から、ゲルマン人は森から呼ばれたという純粋で高揚した名声を受け取ることになったのは不思議であった。ローマ教会の議論はただ新しい弱さの要素をローマ帝国に加えただけだった。しかし、ローマ帝国の滅亡はローマ教会の復活だった。5 世紀の大きな特徴はキリスト教徒の労働者が地球上に広まったことである。

今や殉教者の時代は終わった。哲学者たちは啓示の事実に手を加えて、厄介な者たちに違反する作業を始めた。大司教として任命されることは、属州を征服する事より命がけだった。宗教会議は三位一体の教義が国々にとって危険であると宣言されたその地で開かれ、市民の力はその宣言を実地に移すために使われた。此の時、ローマ大司教の力はまだ全てのキリスト教国の教会に超越していなかった。つまりローマ教皇はまだ地球上でキリストに次ぐ支配者として確立されていなかった。キリスト教の教義の違いは戦争の口実となった。

この時代は国々が混乱し、教会では論争、口論、闘争が起きた。教会は今やただ一つの服従、平和、神聖を教える公然たる教師であり、また唯一の破壊されていない国の機関だった。

488AD、ローマの司教省（のちの教皇庁）は、コンスタンチヌス帝によって寄贈されたものだが、彼は既に自分をペテロの衣鉢を継ぐものとして公言し、新しい政府に、キリスト教を信じたい者には補助を、ただの群衆には嫌悪を与えたことが一つの権威となった。

東ゴート族のテオドリックが 409 年にオドアケルを征服した。彼はアリウス派だったが、ローマ司教の良い評判を育てた。テオドリックの評判は彼の 32 年にわたる統治の、目に見える平和と繁栄によるものだったかもしれない。この時代の彼に対する満場一致の高い評価、彼の勇気と正義、人間性はゴート人とイタリア人の心に二重の良い印象を与えた。

ガリアでは新しい人種が確立された。フランク族のリーダー、クロービスは 496 年聖レミによって洗礼され、フランスの支配階級の大きな血統の始まりとなった。彼はクリスチャンであるクロティルダ姫と結婚した。

イギリスでは、5 世紀が終わる前に他の蛮族がイギリスの秩序の中に定住し、その場所をアングロサクソンが代わりに占めた。

6 世紀

フランクの王
クロービス
559：キルデベルト 1 世
584：クロタール 2 世
596：ティエリ 2 世

東ローマ帝国の皇帝
500　アナスタシウス
518　ユスティヌス
527　ユスティヌアヌス
562　ユスティニアヌス 2 世
578　ティベリウス 2 世
582　マウリキウス

文人
ボエティウス　トゥールのグレゴリウス　聖コルンバ　聖ベネディクト　聖グレゴリオ 1 世

六世紀の重要な出来事：ユスティヌアヌス帝による聖ソフィア寺院の再建―ユスティヌアヌスの将軍ベサリウス、イタリアを征服―ユスティヌアヌス、娼婦のテオドラと結婚―ユスティヌアヌス法典―中国から蚕導入―彗星と疫病―ラテン教会とギリシア教会の分離―ローマ教会（キリスト教）の広まり―聖ベネディクトによる修道院主義―ムハンマドの誕生

530 年、コンスタンチノープルを統治していた皇帝はユスティヌアヌスだった。ユスティヌアヌスの将軍、ベサリウスは短い期間でイタリア征服を成し遂げた。540 年の時点で、古い国と新しい国の物事の繋がりはただ一つの点だけで可能だった。ローマの領事たちとゴート族の首都からきた皇帝たちを分けていた亀裂を埋める仕事がローマの司教たちに残されたのは奇妙であった。そして既にローマ教皇は聖人を捨てないという政策を取る道を歩み始めていた。

彼らは野心と征服という計画に援助を求めて全ての方面を見たがそれ以後、軍隊や将軍により王国を建設したり、滅ぼしたりすることより、異なった“信仰告白”の方がより影響力を持つことを発見した。553 年に東ゴート族は歴史から姿を消した。

国を遠征軍の司令官に分割することによって、彼らは歴史上初の、後に封建制度と呼ばれることになる制度の大規模な実験を始めた。

同じように 558 年にキリスト教世界に向けて、コンスタンチノープルの司教が東のキリスト教政界のトップである事こそが普遍的に認識されるよう要求が出された。しかし、当時ローマには大司教グレゴリウスがいて、自身の為だけでなく、ヨーロッパの司教を守るために立ちはだかった。その反撃に不満な東の教会は西の教会との大きな利害、教会規則、教義の違いによりネストリウス派から分離した。

ユスティヌアヌスの国内の規制と国外での華やかな外交での成功は奇妙な対比を形作った。彼の将軍、ベサリウスは彼の前任者が失った地を再び取り戻した。しかし、彼の家庭は邪悪と弱さに溢れていた。彼は妻のテオドラに、元女優で娼婦でもあったが、奴隷的な服従を強いられていた。しかし、彼は立法においては天才だった。

彼は新しい法律を作ったわけではなく、古い法律を復元し、簡潔にした。ハドリアヌス帝からユスティニアヌス帝までに出された全ての決定が全開の力を持っていた。彼はトリボニアヌスと他 16 人を雇った。当時最も高名で混沌に秩序をもたらしてくれる学者たちだった。彼らは、それまでの全ての学説を 12 巻に凝縮したものを含むユスティニアヌス法典を 14 カ月で作り上げた。

534 年にはユスティニアヌス法典の学説彙纂が発行された。それには裁判所の最良の判決、有能な法律家たちによる最良の学説、論文が含まれていた。

テオドリック大王統治下の東ゴート族はこの時期ヨーロッパを主導したが、歴史から永遠に消滅してしまったことを我々は見てきた。その代わりとなり新しい民族がロンバルド王国を建設した。我々はこの時期に皇帝たちによるローマの司祭たちの中から教皇を選ぶ選挙が認められたことも知る。ローマ帝国が東と西とに分かれたことも。この世紀の終わりに起こったこと、すなわちアラビアのある町の若者が自分の主人の未亡人と結婚したことが人間社会の状況に、イタリアの征服やフランスの建国よりも大きな影響を与えたことも知る。この若者は 564 年にメッカに生まれた。彼の名はムハンマド、イスラム教の預言者、自分の計画を完成させるために 594 年に引退し、多くの年月を要せずして彼の帝国はインドからスペインまで広がり、キリスト教国とヨーロッパ、それからピレネー山脈からドナウ川までの範囲に同時に脅威を与えた。このように 6 世紀はこの偉大なニセの預言者の出現と共に終わる。

７世紀

フランスの王
614　クロタール３世
638　クロービス２世
692　クロービス３世（ピピン）

東ローマ帝国の皇帝
641　コンスタンチン
685　ユスティニアヌス２世
697　ティベリウス

文人
ネンニウス
アルドヘルム
ベーダ・ベネラビリス

７世紀―修道士の影響―イスラムの征服

このようにムハンマドの教えとキリスト教の教えがその勢力を広げてやがて直接対決することになる時に向かって７世紀は過ぎた。元のローマ帝国内の国々では征服、略奪、危険な状態が横行し、古代の歴史的建造物がほとんど破壊された。それ故に農業は最も低調であり、飢餓や疫病、その他様々な欠乏がヨーロッパ各地を覆った。この時代遍くヨーロッパ中で農業は顧みられなかったが、一か所だけ例外を認めなければならない。修道士たちによって支持され農業が行われたのがイタリアやガリアの各地に設立されたベネディクト派の修道院である。（ベネディクト派修道院はツールのマルティネスによって 360 年に設立された）

聖職者や司祭によって保護された土地に敢えて侵入しようする略奪者はいなかった。修道士は恥ずべき行為とされるまで価値の落ちていた労働を宗教的義務という威厳の高み迄引き上げた。聖ベネディクトは言っている。

「人は自身の手を使って働いたり、鋤を引いたりすることで人間の為に食料を供給する。その時ほど人が自分自身を最も有効に活用している時はない」彼はこうも書いた。「怠惰は人間の魂の最大の敵であることに注意せよ」

修道院が設立された時はいつでも、その周りに肥沃な畑が広がり、数えきれないほどのトウモロコシの山ができた。最後には農作業の行為そのものに何か敬うべきものが宿ると考えられた。

教会は農業を導入し、ローマ帝国の崩壊後にも残っていたローマの学問の遺産を保存すべき場所として全ての王国を有用な場所と考えた。聖職位は多分、国の中での唯一の身分階層というよりは最も影響力を持った位だった。

修道院はこの交流によって新しい情報と学問の中心となった。何百年もの間、外国の状況についてなんでも知っていて、遠くの王国について相互に垣間見たり興味を持ったりしたこともある者は、世俗に生きることを諦め、祈りと悔悛に浸かって時を過ごす修道士だけだった。

この世紀に知性は獣性より優位であることを主張する。教会はその道徳性が低いにも関わらず、世俗を超越する優位性を達成した。

教会は自身を民衆組織か民衆政府の最高位とした。教会は征服した民族にも聖職者の道を開き、征服された農奴を族長より上の位に置きさえした。西の教会は今や大衆の承認によって、ローマ司祭（教皇）を認識したが司祭はその地位が何百万人の上に立つ長であることの利点に気づくのに遅くはなかった。

7 世紀の続き　ムハンマド　イスラムの預言者

キリスト教暦の 621 年、ムハンマドはメッカからダヤ人とクライッシュ族の敵意によって追放されていたが、勝利の後アラビアの大きな町、メジナに入場した。この入場はヘジラ、あるいは聖遷と呼ばれ、全てのイスラム教の記録がこの時をもってイスラム教の始まりとする。彼の説いた宗教は比較的真実に近い。

彼はその土地の偶像を破壊し、禁酒を勧め、純潔、慈善、同胞愛、悪事を許し愛することを説いた。しかし、剣こそが真の福音をもたらすとも。亡くなる時預言者は言った。

「全ては神の計画によって決められた時に起こり、それは早めることも避けることもできない。愛を敬い、お互いに支え合い、忠義と信仰を貫き通すことを、最も道徳的に価値の高い行いに到ること勧め合う。これらのことによってのみ人は繁栄し、他の道は全て破滅に繋がる」

彼はヘジラ歴の 11 年、キリスト教の暦の 632 年、63 才の誕生日に死んだ。

イスラム教の教え

神は一体であること。キリストが神の子であることの否定。イスラムの教えでは 6 人の預言者がいる。すなわち、アダム、アブラハム、ノア、モーゼ、イエスキリスト、そしてムハンマドである。これら預言者の教えはその前任者の教えを取り消している。彼らはモーゼ五書、詩篇、福音書とコーランをイスラムの聖書として認めている。

コーランはタルムードの一部に含まれ、キリスト教徒、ユダヤ教徒の作者によって書かれている。コーランの多くの節は聖書にあるものとよく似ている。聖書と矛盾する節は翻訳者が適切な母音を使っていないことが説明されていて、それはアラビア語には母音字がないからである。

彼らは死後の審判によって肉体が復活すること、罪からの解放を信じている。四つの基本的な宗教的行いは、

1．沐浴をしてからの祈り
2．布施を施すこと
3．断食
4．メッカへの巡礼　　である。

彼らは地獄の存在を信じており、天国は二つあることも信じている。一つ目の天国は肉体的な天国で、信者が四人の天女を持つことができる。天女または天国の妻は労働から作られる。地上の妻は天国を楽しむことができず、どの妻も天国で夫を持つことができない。その償いとして二つ目の天国では神と共に休息することができる。

672 年　ムハンマドの信者たちはコンスタンチノープルの正面の壁に勝利の旗を掲げた。ここで有名なギリシア火薬が、その成分は今でも知られていないが、イスラム教徒に対して使われた。水では消すことができず、時間が経っても火の勢いが弱まらなかった。銃火薬よりも破壊力が強かった。

7 世紀は救いのない世紀であった。男らしさ、愛国心、キリスト教はその勢いが最低であり、ヨーロッパは、分断された人々、疲れ果てた王たち、怠惰な教会、荒れ果てた農地に満ち覆われていた。イスラム教は団結の血で信仰を燃やし、一つの規則に従順でアジアの全ての富に支えられていた。アフリカは、その艦隊が海を席巻し、国を併合し新しい国となり、何百万もの男たちが対立する国々でさらに増加していた。

8 世紀

フランス

711	キルデルク　チャールズ・マルテル	文人・作家
716	ダゴベルト（家宰）	
720	ティエリー	アルクイン
742	キルデリク	ベーダ
751	小ピピン	エグバート
768	シャルルマーニュ	クレメンス
		ヘクサムのアッカ

8 世紀　この世紀はネウストリアの小ピピンとシャルルマーニュの活躍する真に偉大な世紀である。教皇制度が他の権力と違うのは、それが中心地（ローマ）から離れて後も長い間、その地位に着いた者たちの精神的活力が長く続いたことであるとはよく言われる。

ローマはその領地の中心部は弱かったが、周辺部は強かった。これがこの世紀の最も強い特徴の一つである。このことが教皇制度の生命力を強くした。一つはアングロサクソンが自身の利益になるように行ったことの影響によって、二つ目はフランスの王朝が滅亡する危険性を冒して演じた役割によって影響力がさらに増したことである。それは西と東が、つまりキリスト教とイスラム教が直接対決することになったツールの戦いで勝ったことにより強化された。

キリスト教とイスラム教は最初に対決するまでは対峙していた。もしアジアが勝っていたらどのような結果をヨーロッパにもたらしたかを考えることは衝撃に値する。キリスト教はどのような高遠な思想も包含できるよう、そして人間の生活様式や思考様式の多様性を最大限受容できるように影響圏を拡大していたが、イスラム教については、その影響圏は限界があった。

732 年のツールにおける偉大な日の結果は、人間の知性と市民的自由がどれだけ向上していたかに依存していた。それが上回った方が勝った。

次にこの世紀で我々が立ち会う偉大な出来事は、フランスのカロリング家の家宰が王位を叙任されると同時に、君主権を持つローマの司祭に叙任されたことである。これは 752 年のことである。フランスにおいて、小ピピンがチャールズ・マルテルを継いだ。

教皇たちが感謝の念から彼らを「フランス王」、「教会の最年長の息子たち」と呼んだのも無理はない。ピピンの息子、シャルルはフランス人から大王と呼ばれるのは正当だが、虚栄心からはシャルルマーニュと呼ばれる。彼はフランスの王座に就き、彼の軍隊とその影響力を最も遠い国々まで及ぼした。「その男とその時は来る」と思われ、西ローマ帝国は正式に再建されたと感じられた。

シャルルマーニュの時代は歴史上偉大な時期だった。というのはこの時期は老朽化した社会の制度が法的にも正式に終焉を迎えた時期だったからである。それはもはや野蛮な時代ではなく、封建時代でもなく、その二つを繋ぐ架け橋の時代だった。これらの全ての国々がシャルルマーニュの優勢に屈服したまさにこの時期、人種や親族を結びつける絆の一つとして、その土地の土壌の属性、所有権が加えられた。これが異なった人間集団は互いに分離して独立することを主張した。

シャルルマーニュの帝国が彼の死によって分裂し、次の世紀にその分裂した部分がそれぞれ王国になった。近代的な封建主義の基礎が既に敷かれ、国々の王政への道は容易になり、避けられないものとなった。近代ヨーロッパはこれらの分裂した破片であるが完全な部分である国々から興った。それに対して、最初のローマ帝国の分裂は世界を多数の蛮族の餌食となさしめた。後のシャル

ルマーニュの帝国の崩壊はヨーロッパの国々をサラセン人や蛮族に対して団結させたが、それらの国々はさらに、法律によってその交際を規制し、子供の従順さを持って地方州の声を聴き、ローマの統一教会の教皇を脅すような境界の明確な国々にさらに分裂した。シャルルマーニュの帝国ために、ローマ教皇の帝国が成長した。

権力が一時的なのは、それが一人の人間の一生に依存する力を集めたものだからである。神霊の力は個人の助力に依存しないというのが原則である。それでこれらの分解した帝国の破片であった国々から、かつてないほど揺るぎないローマカトリック教会の威厳が興った。

9世紀

有名な君主

フランス	イングランド
シャルルマーニュ	エグバート
ルイ・デボネア（ルイ1世敬虔王）	エセルベルト
シャルル2世禿頭王	アルフレッド大王

文人・作家

ジョン・スコトゥス・エウリゲナ　ヘリオ　マカリアス

9世紀―シャルルマーニュの帝国の分解―デーン人のイングランド征服―フランスの弱さ―アルフレッド大王の統治

この世紀の最初の年、シャルルマーニュが古い帝国の王冠を頭につけ、最も遠い国々でも彼の名声が満ちた。

シャルルマーニュが統治した時代を熟考するのは愉快である。というのはこの時期は二つの暗い社会状態をつないでいる陸橋のような時期だからである。分離、野蛮と暴力の過去と、無知と不機嫌と犯罪の未来を。現代がこれらの特徴のうちのいくつか、あるいは全てから本当に免れているわけではないが。どのような修道院が設立され認可されても、支配者層の一部として、修道院はその教派を維持することを余儀なくされた。

アルクインは聖マルティヌスの同盟者として提供された。（シャルルマーニュ）皇帝は農業と交易の実践と研究を奨励した。彼は美術の気前のよい偉大なパトロンとなった。彼の正義感と時代の習慣は彼の国を三人の息子に分離相続させることとなった。彼らの間に敵意がその後生まれたわけではないが、キリスト教国全体は弱体化した。

スカンジナビアの略奪者（ヴァイキング）の子孫の活躍はこの世紀の大きな特徴である。それによって新しい力がヨーロッパにもたらされ、フランスとイングランドに大きな変化が起きた。この新たな人種と言語の混合によってフランスとイギリスは初めて存在するようになったという方がより正確かもしれない。814年にシャルルマーニュは死んだ。それ以降話す言語が同じである事は同じ種の集団が居住することよりも、より強い絆であると見なされるようになった。しかし、他の状況は国境が明確になった国に分離したことによって同質性が強まることを支持している。

主役は二つの広大な帝国だった。ルイ敬虔王デボネア、この聖人のようなシャルルマーニュの後継者は父のシステムを実行しようと努力したが、この単純で寛大な王家の血筋の王は何も好転させることができなかった。ルイ王は彼の人生における他の法による規制と同じように遺産相続の調整

においても幸運だった。ロタールが帝国の東を相続し、シャルルがそれによってライン川地方を、それに対してルイはボヘミア地方に限って相続した。この君主は教会の守護者であり、嫉妬深いローマの支持者であり、聖人のリストに加えられる価値があった。この帝国の分裂は一族の中で最も残酷で極悪な王は、その子孫で最も善良で徳の高い者の上に悲惨をもたらすという歴史的真実の顕著な実例である。

843 年、最後の分離がフランスとドイツの住民集団に起きた。フランスはその名と国語を得る時、ライン川という自然の国境を失った。ヨーロッパで最も普及し簡単なフランス語という国語を得る代償として、イタリアから北海に向かう細長い国土、それはライン川の両岸を含むが、を失った。とても複雑で不確かなのはこの分離の時以後の長い時間に起こった全ての出来事である。

名実ともに（ローマ）帝国を再建しようとする企ては永続的に行われたのを確認することができる。解体しようとする原理的な動きもあちこちで起きていた。王政への軽侮も形成されていた。王の権威の敵は、ライバルの貴族階級の状況を不安げな目で見ている野心家のキリスト教司祭たちだった。司祭の一時的な権力は貴族の精神的権威への恐怖によって支えられていた。

王や王子、人々が過剰に信じやすいことや迷信に弱い事は証明されていたので、ヨーロッパ自体を聖職者の足元にひれ伏させ、剣と王冠を司教の杖に服従させることはたやすい事だった。この時代は人の心が最も暗い時代だった。また最も人間社会が不安定な時代でもあった。サクソン人は東に、サラセン人は南にヴァイキングあるいは北方の民族は海にいて、全てのキリスト教国は彼らの襲撃にさらされた。これら北方の民族は吟遊詩人であり、兵士、水先案内人、海賊であり、恐れや慈悲、良心の呵責を欠き、危険と勇気ある死を愛し、船や武器の扱いに長けた異教徒だった。

彼らはヨーロッパ南部が経験したそれまでで最も恐ろしい訪問者だった。人々は保護を求めてその土地の大地主の下に逃げた。大地主は聖職者たちだった。破門は戦争を好む貴族や諸侯に対しての彼らの武器だったが、デンマーク系の北方民族は教会の鐘、聖書、蠟燭を気に掛けはしなかった。

デーン人の侵略は実はイギリスとフランスに勇気と男らしさを復活させた。聖職者に苦しめられ意気消沈した人々は、それら飼いならされていない北方民族の子孫から新鮮な衝撃を受けた。北方民は宗教の勢力が強い時代の人々であり、宣教師たちの精神に戦死の勇気と征服者の力を与えて再び団結させた。オーディンは依然として彼らの神だった。ヴァルハラのドアは死後の彼らに開かれており、敵の頭蓋骨は人を酔わせるエッダで泡立っていた。

中世において封建主義は北方民族に襲撃される時代の聖職者と貴族の相対的地位の必然的結果として理解される。

10 世紀　“Den Muthigen gehoert die welt”　世界の勇気あるものへ

全ての歴史は少数の強く熱心な人物の生涯を中心に回る。10 世紀はイングランドのアルフレッド大王の死によって幕を開ける。彼は 901 年に死んだ。彼は誤った信心のない聖人であり、知識を誇示しない学者であり、自分の国を護るためだけに戦った戦士であり、残酷な血によってその手を汚さなかった征服者であり、逆境にあってもめげなかった王子であり、得意の時期にあっても傲岸にならなかった。彼はシャルルマーニュ以後のヨーロッパ数世紀の間に現れた最も偉大な王子だった。

デュンスタンは野心的で修道士的な神父であり、政治家であった。この人はその高潔さのマントの中に大いなる野望を隠していた。デュンスタンはウーセスターとロンドンの大司教に任じられた。

1．デュンスタンは世俗の聖職者の結婚に抗する影響力を行使した。
2．彼はベネディクト修道院に戒律と独身主義を導入した。
3．彼は修道院に資産を与え、それによって著名で権力のある聖職者から国の役職を剥奪した。
4．教皇と修道院の利益のために、彼は裕福な貴族が神の法と、人間の法を、制限なしの暴力で行使することを許可した。

978 年デュンスタンは政治的な力を失い、修道院に追放され十年後にそこで死んだ。

ウィリアム征服王によるノルマンコンクウェストは、イングランドの国と社会慣習に根本的な革命を引き起こした。ウィリアム征服王はノルマン人のロロの直接の子孫だった。ロロは 876 年に（フランスに）上陸し、912 年まで闘争を続けた。フランスのシャルル単純王は北方民族のヴァイキングと和解するためにネウストリアを割譲した。ロロはロレーヌで洗礼を受けた。この後、ロロはシャルル単純王と誓約するよう要求された。

1．彼はシャルルマーニュの後継者の地位を下げた。
2．彼はフランスにノルウェイ人の永続的な植民地を開いた。
3．彼はフランス北部に新しい血、活力、野心を注入した。
4．彼ら北方民族のヴァイキングの子孫がノルマン人の戦士となり、サクソン人のイングランドを征服した。

オットー大帝

ドイツはこの世紀に一つの国としてその場所を確保した。ドイツはそれまでローマ人に征服され蹂躙されてきた。ドイツは東フランク王国の広大な平原から侵入する気性の激しい蛮族に徹底的に破壊、荒廃させられた。シャルルマーニュの帝国内にあっては一つの封建領土だった。911 年、カロリング朝（シャルルマーニュの子孫）のドイツの分家が滅亡した。シャルル単純王（シャルル 3 世、ロロが恥をかかせた同一人物）が正当な後継者だったが、彼は個人で相続を主張できる国民的敬意がなかった。ドイツ人は自分たちの中から君主を選ぶことにした。フランコニア家のコンラッド王が皇帝となった。コンラッド王、オットー大帝の父、は問題もなく死んだ。オットー大帝にとって、ドイツはシャルルマーニュ以後の国々の中で最も借財に苦しむ国だった。926 年 24 歳でかれは皇帝となった。

1．彼はボヘミア公とその国民を征服して追放し、キリスト教を受容し彼の領土を併合した。
2．彼は粗暴で好戦的なハンガリー人と対峙し勝利を収めて彼らの頻繁な侵入を防いだ。
3．彼は傲慢な勢力である封建領主を彼の軍隊の力と優越する才能で抑え、臣従させた。この時、この国には三つの傲慢な勢力があった。それは皇帝、封建領主、教会だった。
4．彼は封建領主の聖職者に一時的な慣例を許し、勢力の均衡を図った。同時に司祭の職を創設しキリスト教を進展させた。オットー大帝が教皇の任命権と司祭の叙任権を握ることで教会権力の上に市民を置いたことは、シャルルマーニュよりも大帝の名にふさわしい。それは彼が服従させた国にとって彼の治世はより有益な影響があったからである。

我々がロシアという国と初めて歴史上出会うのはこの時代である。コンスタンチノープルと黒海沿岸の港へ海賊として何度も遠征した後、ロシアはより大胆になり活力を増した。彼らはコンスタンチノープルを占領しようと決意し、ドナウ川を渡り、ブルガリアを征服したが、ヨハン・ティミスケスによって何度も撃退され退却した。スビャトスラフ 1 世が敗北した皇帝だった。彼の母オリガは卓越した王女だった。彼女はキリスト教を大切にした。彼女はコンスタンチノープルの大司教

によって洗礼を受け、彼女の国に福音書を導入しようと努力したが実を結ばなかった。彼女の息子と臣下は古代の宗教の信奉者と再婚した。しかし彼女の孫のウラジミールは偶像崇拝を放棄し、キリスト教を受容しオリガの卓越した知恵によって敷かれた道を追求した。彼女は今ギリシア正教の聖オリガである。

マフムード（偶像破壊者）

コラサン地方のガズニ公国は奴隷から身を起こしたアルプ・テギンによって建国された。967 年にイスラム教の征服者の中でも最も有名で、最初にインドにイスラム教帝国を建国したガズニのマフムードが生まれた。彼はインダス川の向こうにある国を征服すると決意し、少なくとも 12 回のインド遠征をした。彼はバンデルセンドからグジャラトに到る全ての国を支配した。彼は自分の支配する地域に安定した秩序を形成し、ペルシア語は宮廷の言語となった。彼の治世にアビケンナ（偉大な医者）とフェルデューシー（有名なペルシアの詩人）が活躍した。

11 世紀

1003 年にセントブライスの祭りの日、デーン人の虐殺が起こった。当局による制裁、年齢も性別も関係ない拷問と死によって刺激された大衆の激怒。

1004 年　デンマークのスベン王が前年の虐殺に対してサクソン人に全面的に復讐。

1066 年　ヘイスティングの戦い起こる。中世で最も重要で決定的な戦いの一つ。ノルマンコンクエストはイングランドの社会慣習と政府に完璧な革命的変化を起こす。それは大きな王国が一州の王子により征服されたことを意味した。ノルマン人の出現後、イングランド人は抑圧された。反乱した者は鎮圧され再び抑圧された。彼らの反乱は調和がなかった。彼らは自分たちを導くよう男たちに望んだ。ノルマン人の支配の後数年して、彼らは絶望の淵に沈んだ。イングランド人の名前は非難の的となった。イングランド人は何百年も教会や政府の権威ある地位につけなかった。“神は惨めな、最も非道に抑圧された人々を奪取した” とアングロサクソンの年代記作者は言っている。

まず彼らの所有物が剥奪され虐殺された。それから重税と宮廷の不正な法令によって財産を失った。ケルト人の子孫、サクソン人、デーン人はノルマンコンクエストによって覇気を失い、国民性、宗教、そして言語を失った。

ヒルデブラントは 11 世紀において最も目立った活躍をしたローマの助祭長である。その傑出した人格により、彼はイタリアの聖職者の世界を支配した。彼は選ばれてリーダーとなった。彼は聖職者に共通の大義を達成するための希望の星だった。彼は恐れを知らず、大胆で活力にあふれていた。彼は良心の葛藤にほとんど注意を払わなかった。教皇アレクサンドルの死に当たって、かれは教皇グレゴリー 7 世としてローマ教会の最も権威ある地位に付けられた。

1．ヒルデブラントは世俗の王女が教会管区を処分できる権利を取り除くよう努力した。
2．聖職売買の罪を犯したものを教会から破門した。
3．聖職者の独身主義を確立した。
4．全ての王国や帝国がローマ教皇に服従するよう努力した。
5．ドイツの皇帝を破門した。最も大胆な権力の掌握占有だった。
6．彼の最後の野望は聖地エルサレムをアジアから守るためにヨーロッパに軍備を整えさせることだった。

1096 年、エルサレムは（セルジューク）トルコに占領された。エルサレムはすぐに全ての国の劇

場になった。アミアンのピエール（隠者ピエール）は 1094 年にパレスチナにたどり着いた。彼は有名な扇動者であり、熱烈な信者で十字軍となった。エルサレムにいた時、彼は当地の不正な裁判とエルサレムに住むキリスト教信者の困難な状況を目撃した。彼は聖戦に訴えた。彼は自分が聖地を救えと神に召命された姿を想像した。1095 年彼は教皇ウルバン 2 世に聖戦を呼びかけるよう委託された。裸足で粗い毛糸のシャツ、サージの下着を肌のすぐ上に着て、手に杖を持ち、ロバに乗り、財布も友もなく、彼はフランスとイタリアを横断した。彼は市場で、教会で、城で説教をした。彼は自分の裁判で証人が不正な証言をしたことと裁判に苦労していることを話した。

彼は復活の教会が冒涜されていること、狂信的なトルコ人によってキリスト教徒の侮辱が積み重ねられていることを説明した。彼は人々の心の最も奥までかき回した。彼は一つの合言葉で立ち上がった。“これは神の意思である”と叫びながら。ピアチェンテャとクレメントの公会議で教皇は雄弁に聖戦を呼びかけ、それは聖職者、騎士、独立自営農民（ヨーマン）そして農民たちに歓喜を持って遂行された。1096 年の聖母昇天の祝日(8 月 15 日)が第一回十字軍の出発の日と定められた。

12 世紀

11 世紀の間、聖地への巡礼はそれまでより多数の人々がするようになった。11 世紀の最後の 10 年、パレスチナは西からセルジュークトルコの大群によって蹂躙された。これらの偏狭で大胆な征服者はキリスト教徒を厳しく取り扱い、ファーティマ朝の人間より大掛かりな裁判にかけた。“それは神の意思である”が最も明確で確かな十字軍の主要原理だった。この熱狂を確立するために修道僧や聖職者によってあらゆる手段が使われた。罪の許し、自己否定の実践からの解放、永続的至福の保証、虚偽の奇跡を見せることなどが行われた。一時的な給付金、借金訴訟の取り下げ、無利子での貸し付け、税の完全な免除などの方法も使われた。

1096 年隠者ピエールによる第 1 回十字軍。この最初の十字軍の 3 年という短い期間の内に、滅多におこることのないなんと多くの犯罪や悲惨な状況が現出したことか。100 万人が死の途に就いた。十字軍に参加して死ぬことは名も知れず死ぬことだった。 2 年で 4 万の大軍が取り残された。1099 年の 6 月、彼らは聖地エルサレムに着いた。40 日間の包囲と、40 日間の間災難、苦悩が続いた。1099 年の 6 月に王子ゴドフロワがキリスト教徒を率いて聖地エルサレムに着いた。 7 月 5 日にゴドフロアはエルサレムに入城した。それに続く 7 日間に男女、子どもを含む 7 万人のイスラム教徒が虐殺された。 8 日目に髪を剃り、裸足で、罪を深く悔いた悲しい顔の彼らは、ゴルゴタの丘を登り、復活の教会の前にひれ伏した。王子ゴドフロワは領主に任命され、“聖墳墓協会を守護する王”となった。

第 2 回十字軍― 1147 年― 1149 年　クレルボーのバルナルドス（聖ベルナドゥス）によって扇動され 90000 人が参加するも、この企図の価値に見合ういかなる目的も達成できず、ほとんど滅亡した。

第 3 回十字軍― 1189 年― 1193 年　エルサレムはサラジン、イスラム教徒に占拠されていた。狂信的な時代にあって彼自身も狂信的なイスラム教徒だった。彼の純粋な徳性は我々に評価を要求する。ドイツのフリードリッヒ 1 世赤髭王、フランスのフィリップ 2 世尊厳王、イングランドのリチャード 1 世獅子心王がリーダーだった。アッコンを包囲したとき、10000 人が死んだ。サラジンはアザラスの戦いでリチャード 1 世に敗れた。エルサレムは奪回された。

第 4 回十字軍― 1203 年、コンスタンチノープルまで辿り着いたがそこで終わった。

第 5 回十字軍― 1218 年　フランスの兵士がエジプトを経由して聖地まで行った。彼らは更に遠

方には行かなかった。

第 6 回十字軍― 1249 年― 1254 年　フランスのルイ 9 世が行ったが、彼は完全に敗北しエジプトで捕虜となった。

第 7 回最後の十字軍― 1207 年　聖王ルイ＝ルイ 9 世はチュニスの近くで死んだ。アッコンはイングランドのエドモンドによって奪回された。10 年の停戦が発効した。1291 年ラオデキア、トリポリ、ベリタス、シドン、ティルス、ヤッファとアッコンがイスラム教徒によって奪回された。スルタンの命令によってラテン帝国の都市の教会や砦は破壊された。強欲や恐怖が動機となる、同じく敬虔で無防備な巡礼者に聖墳墓教会は未だに門を開いている。世界の論争によってはもはや反響しなくなったエルサレムへ通じる海岸は、死者を悼む孤独な沈黙に覆われた。

十字軍は狂信の途方もない大きな暴発によって始まった。そしてその精神を常に維持することができなくなったために終わった。彼らは大規模な好戦的な巡礼者と考えられるかもしれない。十字軍が人間の道徳性と敬虔さにもたらした影響は全て有害だったようだ。十字軍に参加した者たちは人間の凶暴性と意思の固さをさらに悪化させた。

1．最初の十字軍ではイスラム教徒は嫌悪され、軽蔑され、野蛮人として殺された。しかしより近くで知り合うようになると、彼らの勇敢さ、才能、知識、芸術への尊敬が生じた。
2．十字軍は暗闇の中にいた西洋の国々に、光とより豊かなより進んだオリエントの文明をもたらした。
3．十字軍は西洋の人間に、教皇の計画と政策、聖職者の現世の権力を増強しようとする教皇の行動の動機に対する警戒心を開いた。それは尊敬の心をなくさせ、世俗の人々の自由な思考を刺激し、ルターとプロテスタントによる宗教改革へと繋がる道を開いた。
4．人々の習慣、趣味、衣服、食物、ぜいたく品に大きな社会的変化を引き起こし、十字軍の文学を誕生させた。十字軍は初めて海洋交易を介した商業の大きな発展をもたらした。イタリアの商人魂の基礎を作り、イタリアの諸都市を強くした。

12 世紀の続き

1100 年―ラテン帝国のキリスト教徒によってイスラエル王国が建国され、ゴドフロワが領主に任じられて王冠を頂き、聖墳墓教会の守護者となる。

1130 年―アベラールの時、学問としての哲学が最も深遠な領域に達する。ピーターアベラールは 1079 年、フランス、ナントの近くに生まれ、1142 年に死んだ。アベラールの名声は他の生きているどの哲学者よりも高かった。彼の名が後世まで残ったのは、彼の学生であり愛人でもあって、最後には妻でもあり同じ墓に入ったエロイーズとの関係性による。彼の主張したことはわずかで、しかも過大評価されてきた。「彼は何も発見しなかったし、何も改善しなかった。彼は混乱させ幻惑させただけである」とハラムは言う。「アベラールの人生全体は、天才が難破した船のようになったものだった。その天才は彼自身の暴君的感覚にも、後世の者にも役立たない天才である」と。

1141 年―ローマ教皇とドイツの皇帝がゲルフとギベリンという名のもとに反目した。

1145 年―アンチオキアとダマスカスがセルジュークトルコに占領される。これが第二回十字軍につながる。

1164 年―ジンギスハーン（1164 年― 1227 年）生誕。十字軍がアジアの西で戦っている間、アジアの東の国々は、世界がそれまでに経験した最も偉大かつ残忍な征服者ジンギスハーンによって、皆殺しの脅威にさらされていた。彼の本拠地はタルタリア（タタール）の東にあり、彼はモンゴル

民族だった。彼は 1201 年、反乱を鎮圧し、反乱した者たちの首長 70 人を窯ゆでにした。

1202 年彼はヴァングカーンを破って彼の広大な支配地を併合し、抵抗する者はいなくなった。彼はジンギスハーンのタイトルを名乗り、ハーンの中のハーンとなった。彼は中国の Hya、ツングース、キタイ、トルキスタン、ガズナ、ボカラ、ペルシア、そしてインドの一部を蹂躙し、征服した。カスピ海からインダス川、東シナ海までの都市という都市は包囲され占領された。国家や王国はあまりにもこの 4 年間の襲撃で破壊され人間が殺されたためにそれから回復するのにその後の 5 世紀間でも足りなかった。彼は数多の暴君の中でも最も残酷で血に飢えた暴君だった。彼は国々とその民を彼自身の国とその民で殲滅するために戦争を起こした。彼は一日で 10 万人の捕虜を処刑した。彼は 1400 万人の人類を殺害したと計算されている。彼の征服した範囲は東西 1800 リーグ（8640 キロ）南北 1000 リーグ（4800 キロ）に及ぶ。

彼の息子の一人はインドを征服し、他の息子はボルガ川を渡り、ロシア、ハンガリー、ポーランドを崩壊させた。3 人目の息子はシリアに入場し、トルコの沿海州を取った。この広大な帝国は他の全ての国を信じていた。それはあまりにも四方に延びていて、普通の人間が統治するには余りにも広大過ぎた。それはいくつかの小さい王国に分裂したが、その王国はみなジンギスハーン本家への忠誠心を持っていた。

1170 年―トーマス・ベケットの死

1187 年―チベリアス（ヒッティーン）の戦い。サラディン（イスラム教徒のスルタン）がキリスト教徒を破る。

1192 年―アゾタス（アルスフ）の戦い。サラジン、リチャード 1 世獅子心王に敗れる。

13 世紀

1215 年―この年にローマ教皇インノケンティウス 3 世がラテリン公会議を召集。彼はその時異教徒に対する十字軍を要請し、全ての今ある世俗の権力者に、どこでも異教徒を見つけたら根絶やしにすることを要求した。同じ年、イングランドでは諸侯と人々はジョン王からマグナカルタ（大憲章）の諸権利を奪い取り、王の宗教的自由と財産権を許可する権限を禁止した。全ての宗教的誘惑、贖宥状に関する宗教戦争は持続した。シモン・ド・モンフォールをリーダーに、キリスト教聖職者たちに率いられたフランスとイギリスの騎士たちが多数参加した。その宗教戦争は犯罪の母である迷信が引き起こすことのできた全ての残虐な野蛮性をもって遂行された。当時栄え文明化していたラングドック（州）は廃墟と化した。州内の都市は放火され、住民は火事と剣とによって一掃された。キリストの名において、またローマ教会に属する神の副官の命令によって、百万人の住民が絶滅させられた。しかし、「絶滅の牡牛」同じ教皇インノケンティウスによる蛮行を経験したこの年は、イギリスのジョン王の忠告、威嚇、命令に教皇が反対したことによって、マグナカルタの諸権利を奪取することができたことでも記憶される年になった。

マグナカルタはイギリスが法治国家に発展する最初の努力の成果だった。それはイギリスの自由の要石であり、全ての階級の自由民に平等な市民的権利を分配したことがマグナカルタの特異な美しさを構成する。これはイギリスの人々に新たな精神を吹き込んだ。マグナカルタは不動の基礎の上に市民的自由を確立し、しかも、古くから続く君主の統治下で国家が独立することを防いだ。騎士道における訴訟後見人の無駄は抑えられた。女性の相続人は結婚を強制されることも、さもなければ土地所有権を偽造する必要もなくなった。

ロンドンや他の大都市における商店の営業権は不可侵の権利であることが宣言された。外国の商

人に対する商業の自由も許可された。裁判はウエストミンスターで行われることに固定された。裁判なしに誰も投獄されることはなくなった。これはイギリスの自由にとって防壁となる基盤であった。マグナカルタは基本法であると考えられた。それ以後他の法から付け加えられたものは時代への適合化と注釈に過ぎなかった。

1236 年　ロンバルドの商人によって、為替手形として最初の紙幣が使われた。このアイディアは中国に由来する。これは近代の銀行システムの基礎である。

1241 年　ヨーロッパの 80 の都市が相互に協力して、海賊や強盗、貴族の抑圧から都市を防衛するためにハンザ同盟を結成した。自由都市はブレーメン、ハンブルグとリューベックだった。

1273 年　ハプスブルク家のルドルフがオーストリア帝国を確立した。彼は勇敢で活動的であり、正しい人、正義感が強く、判断力が良かった。彼はイタリアと教皇を彼ら自身に任せた。彼は強盗を罰し、70 を超える諸侯の城を破壊した。彼はボヘミア王から、シシリア、カルニオラを回復した。

1290 年　ローマは古代のその名声による全ての恐怖によって、13 世紀に新たな恐怖を触発した。ローマは再び、世界の愛人となり、王たちはローマの家来となった。この時代の教皇はヨーロッパの全ての王国を正式にローマ教皇庁の支配下に置こうとした。この優越性の大部分は以下の教皇庁の強さに由来する。

1．教会法の施行

2．ドミニコ派やフランシスコ派によって創設された修道士の位階秩序

3．教皇や司祭が施行する権限を持つ教会法。

教皇権とその優越性の明らかな減退は 1290 年のボニファチウス 8 世から始まり、彼はそれまでの前任者より権力の声高な行使を自重した。

14 世紀

スイス

ハプスブルグ家のルドルフが死んで、アルバートがスイスの唱道者となった。1308 年、3 人の男、スタンフチェン、ファースト、メルキサール、と 30 人の兵士が夜に協約を結んだ。この時 3 つの州が反乱し、オーストリア人を追放することを決めた。オーストリア人はその時、スイスの小作人に恥をかかせることを決めた。

1305 年　モルガルテンの戦いが勃発。これはスイスにおけるマラトンの戦いだった。この戦いの大きな特徴は、足軽が騎兵に勝ったことである。ヨーロッパの歴史においてスイスの事件はほんの小さな部分を占めるに過ぎないが、これほど大きな成功の中の大きな美徳は他のどこにも見つけることができない。スイス人の戦いにおける堅実性は他に比べる者がない。

1385 年　センパッハの戦い起こる

1346 ―リエンツィ

13 世紀の間、ローマ教皇はフランスのアヴィニオンに幽閉されていた。都市ローマはひどい環境のまま放置されていた。ローマの市街は強盗、騒動、無秩序が支配した。貴族たちはいつ終わるともしれない戦いに明け暮れた。この時期ほどローマが修復不可能な破壊を受けたことはない。この腐敗と悲惨の最も殷賑だった時期に、無名のニコラ・デ・リエンツィがローマの再建事業に着手し、正しい秩序の回復のみならず、偉大な古代ローマの栄光も再建しようとした。

リエンツィは生まれ以上の教育を受けた。かれは最良の著作物を学ぶことで自分の心を涵養し

た。市民は彼を護民官に選出し、新しい政府の長にした。当初、その効果は素晴らしかった。人間らしい生活が保障され、悲惨は霧消し、商業は改善し、農業が進歩し、公共の場や国の施設は修繕され、美しい絵画や、詩歌、彫刻が市民の生活を向上させた。教皇はリエンツィの政府に大使を派遣しさえした。ローマは今一度、法律と贅沢を学ぶ場となった。しかし、リエンツィは成功に酔い、それから高慢になり、彼の前任者より支配的、暴君的になった。彼の性格は知識と雄弁術と他に優越することへの熱意と、虚栄心、人間との交流経験の乏しさ、不安定さ、肉体的な臆病さの混ざったものだった。これらの内、後者の性質が顕現化してきた。これらは彼の美徳を凌駕し、彼のもたらした利益を人々に忘れさせた。彼は唱道せざるを得ないように追い込まれ、亡命した。その年の終わり、ローマの秩序を回復するようにと教皇によってローマに送られた。人民の長である身分から、彼は教皇の雇われ召使となった。ローマ人は彼がもはや自由ではない地位に着いたので彼を尊敬しなかった。そしてローマの通りで群衆に殺された。バイロン卿は彼の事を「ローマの暗黒時代の救い主」「ローマの崇高な希望の友、最後のローマ人」と呼んだ。

1348 年　スペインのムーア人の力が最高潮に達する

1346 年―クレーシーの戦い

1356 年―フランス、ポアティエの戦い　イギリスの勝利

クレーシーの戦いでイギリス軍によって戦争で最初に大砲が使われた。このイギリス軍の偉大な勝利は中流階級であり、騎士やその従者に着き従っていた、鎧を着ていた弓矢の射手のおかげであった。イギリスの独立自営農民、ヨーマンは自国の戦場で使い慣れたその強く安定した弓を弾き、個人が有能であることと市民が自由であることによってその武器を恐れなくなっていた。13 世紀に鎖帷子は戦争で使われなくなった。この時期には鉄の小札が固く結びあわされたものが鎧として使われるようになった。同時に馬も防禦されるようになった。騎士は剣を持ち、斧や短刀で戦った。この時期の戦争ほど兵に危険が及ばない時期は人類の歴史の中で一度だけ、そしてただこの一度だけで、他にはほとんどなかった。防禦する技術が破壊する技術を超えた。イギリス人の足軽に射られた弓は、火薬が発明されるまで最も手ごわい武器だった。クロスボウは、弱兵が強力な武器を簡単に使えるようにする機械だった。一方偶然の発見によって、軍事システムが変化する道を準備したのみならず、現代でも引き続き政治的影響を及ぼす範囲を拡大しているもの、それは火薬の使用であった。

1384 年　ジョン・ウイクリフが聖書を英語に翻訳した。彼はローマ教会の宗教改革と、修道院と女子修道院の聖職者の昇進に関する文書破棄を主導した。同時に抑圧されたイギリス人が元気を取り戻し、大衆の反乱が起こった。

15 世紀

この世紀は人類の年代記の中でも、最も桁外れに素晴らしい時代である。この世紀はローマ帝国が滅亡して以後 10 世紀までの時代と比較すると対照的な明るさを提供する。この世紀は新しい時代の始まりであった。一般的な戦争はなく、共通する新たな企てもなく、重要な連盟もなかった。一つの顕著な特徴は同時に異なる数カ国で知的生活への興味関心の高まりが呼び覚まされたことである。それは物語の時代であり、夢の、改革の初期、そして大胆な投機の時代であった。大衆の自由がイタリアで復活した。ダンテ、ペトラルカ、ボッカチオ、サボナローラ、ミケランジェロが暗黒の時代の無知と陰鬱をそれぞれ別な方法で追い散らそうとし、それに対してマルコポーロ、コロンブス、ダ・ガマ、カブラルが人類の注意を新しい世界と知られざる富の源泉に向けた。二つの重

要な発見がこの世紀の栄光をなす。

1．活版印刷術の発明

2．磁石の極性の発見が羅針盤の発明に繋がり、磁石の使用とその自信によってアメリカ大陸が発見された。建築、絵画、彫刻、そして文学がそれまでのどの世紀より進歩した。それはミケランジェロ、ティッツアーノ、ラファエルの世紀だった。

1402 年　トルコの「アンカラの戦い」チモールがオスマン帝国のバヤジット 1 世を破る。

チモールはモンゴルの系統で、ジンギスカンの子孫だった。ペルシアのコラサン地方、タルタリア地方が彼の強力な軍隊に屈服した。フレグはバグダードとダマスカスを占領した。彼はグルジアを降伏させ、遠くモスクワまで進軍した。そこで彼は反転し、ユダヤに入りガンジス川を渡ってデリーのマフムードを破った。1402 年に彼はアンゴラで十万人のトルコ人を捕捉し、12 万人を殲滅した。王を捉え彼らの王国を支配した。

中国を征服しに向かう途中、彼の進軍は 1405 年突然彼が死んだことによって停止した。彼は最も偉大な戦士の一人だが、最悪の君主の一人でもあった。彼は有能で、勇敢、寛大だったが、野心的で、残酷、抑圧的でもあった。彼は神として崇められ、厳しい法を作り、処刑した。彼の王国では、強奪、仲違い、軽犯罪は知られていなかった。繁栄していた都市を彼の軍隊が通過した後には、彼の戦利品「髑髏のピラミッド」が残った。

1415 年―アザンクールの戦い。イギリスのヘンリー五世がフランスに勝つ。フランスの兵力は 4 対 1 で、イギリス軍は兵糧がなかったが、包囲され、両側を森に挟まれた狭い道で待ち伏せされ襲撃された。10000 人のフランス兵が殺され、14000 人が捕虜となった。この後、2 年間の休戦を許可し、ヘンリー五世はイギリスに帰還した。

1424 年―ジャンヌダルクがオルレアンを包囲から解放した。ジャンヌは王太子をランスに届け、シャルル 7 世として戴冠するのを見届けた。

1438 ― 1444 年　印刷術において金属活字を使用することが発展する。古典文学が再発見される中で、イタリアについての学問に関する文書が発掘され、解読され、複製され、その古典文書の中にはいくつかあまり有名でないドイツ人によるものが含まれるが、研究されるにつれて、人類の歴史にとって最も重要な発見が徐々に完成されていった。

麻や他の繊維から紙を作る技術は 14 世紀中ごろまでヨーロッパでは知られていなかった。それまでは動物の皮から作られた羊皮紙が使われていた。トランプのカードが大量に複製されるようになるのは 14 世紀中ごろに遡るが、それが可能になったことによって印刷術が更に強固な信頼を得ることとなった。この後聖人が同じ長さの説明的な言葉によって表現描写されるようになった。

1438 年―木版印刷がフストとシェッファーによって導入される。しかし、より偉大な印刷の改善は 1444 年に金属活字がオランダ「ハールレムの鋳物師」によって発明されたことである。マインツ版の最初のウルガタ聖書、マザラン聖書と呼ばれる聖書が 1445 年に（グーテンベルグによって）印刷された。

1447 年― 1462 年に聖書の詩篇を編集したもの、1465 年に 2 番目に印刷されたマインツ版聖書、キケロの『義務について』が印刷された。これは新しい技術による、洗練された文学への最初の献呈品である。この技術はベニス、フィレンチェ、パリからロンドンに急速に広がった。

1444 年―トルコ人（オスマントルコ）がヨーロッパで覇権を確立した。ポーランドのヴァルナでヴワディスラフ 3 世を破り、死に追いやった。フニャディはベルグラードで彼らに立ちはだかった。オスマントルコ軍はセルビア全土を征服し、全ヨーロッパに非常な警戒心を起こさせた。12 年間、

フニャディはオスマントルコ軍の攻撃の矢面に立った。彼はしばしば敗北したが、その敗北には征服されなかった。彼はトルコ軍に恐れられ、嫌われた。

メフメト二世によるベルグラードの包囲は、フニャディによって解放された。ベルグラードの解放は、異教徒の絶え間ない勝利によって驚愕させられていたヨーロッパ人の精神を復活させた。メフメト 2 世自身この衝撃の重要性を認識していた。これがハンガリーを破壊から防ぎ、その後ヨーロッパ西部が侵略されることを防いだ。

1480 年―スペインに異端審問所が設立された。異端審問所はローマカトリック教会による、異端者の発見、抑圧、懲罰、カトリックへの不信心、その他の違反に対する審問を行う裁判所である。キリスト教の確立当初から、異端審問官は存在した。第 4 回ラテラン公会議（1215）は教区牧師と２人の真の平信徒は異端かどうかを調べてフランス南部のラングドックにいる司祭に異端について報告すべきことを命じた。

1048 年―異端審問所はドミニコ派の修道士によって主宰される裁判所として、すぐにスペイン、イタリア、フランス、ドイツで一般的となった。フェルディナンド王とイザベラ女王の時にムーア人とユダヤ人を迫害した。異端審問所はそれから国家の異端審問所、あるいは聖なる法廷として権威ある地位につき、大審問官トマス・トルケマダの下、16 年間で 9000 人が火刑に処せられた。

17 世紀にはこの精神の昂揚は収まった。1808 年、異端審問所はナポレオンによって廃止された。1825 年には再建されたが、1835 年に再び廃止されその歳入は国庫の債務返済に充てられた。

1486 年―バーソロミュー・ディアス、喜望峰を発見する。

1492 年―コロンブス、新世界のサンサルバドルに上陸する。

1497 年―カボット、ブリティシュ・アメリカのラブラドールに上陸する。

1498 年―コロンブス、アメリカ大陸に上陸。

1498 年―バスコダ・ガマ、喜望峰を回ってインドに。

1499 年―ポルトガル人カブラル、南アメリカのブラジルに上陸。

16 世紀

前の世紀はヨーロッパ半島の冒険心に溢れる航海者たちによって開けた明るい眺望のうちに閉じた。16 世紀はスペインの君主が彼らの栄光であるコロンブスを鎖につないだまま帰国させることにした不正な命令によって幕を開けた。それはローマ教皇に、対抗者に毒を混ぜるが誤って自分が飲んでしまい、恐ろしい死に到るという事態を引き起こした。ある君主は妻と教会から離れ、愛人と結婚したいがために離婚しようとしたが、法的に不可能であったので自身が教会の首長であるとして離婚した。この世紀はルターの、ツビングリ、カール五世、グスタフ・バーサ（スウェーデン王グスタフ 1 世）、コペルニクスとケプラー、エリザベス 1 世とカトリーヌ・ド・メディシス、ロヨラとノックスの世紀である。この世紀はドイツとイギリスにおける宗教改革、人民がその宗教や思想の自由を求めて立ち上がった時代である。

1502 年―コロンブスがバスコダ・ガマよりより直接的にインドに行ける航路を探すためにアメリカに最後の航海に出発した。コロンブスは困窮の内に 1502 年に死んだ。

1500 年にヘントでその後 10 世紀間、彼の所有した土地の範囲に於いてシャルルマーニュと肩を並べるか同等と言いうる偉大な君主が誕生した。

1505 年―カール五世は神聖ローマ皇帝、スペイン王となった。彼の大きな行動動機は領土の拡大だった。この時期、ドイツはオスマントルコの侵入に脅かされていて、二つの強力な派閥に分かれ

ていた。それはカトリックとプロテスタントである。共同行動をとるためにプロテスタントは多くの譲歩を強いられた。カール五世はバルバロッサ海賊を征服した。

1547 ― 67　ケント公会議。この公会議で決められたものはローマカトリック教会の最後の権威ある教義や布告と考えられた。

1519 年―ルターの宗教改革、信仰によってのみ義とされるという最初の偉大な考えが提示される。ルターの偉大な友、援助者はメランヒトンとエラスムスだった。

1519 年―ライプチッヒでルターとイアー博士の論争が行われる。これは宗教改革における壮大な知的論争であり、二番目に大事な考えを生み出した。それは聖書に書かれていることこそがキリスト教の究極的な権威の源泉であり、人間はそれを解釈する権利がある。これを主唱し、他の異端的主張をしたことによってルターは破門された。

ルターの破門
正典が教える恐ろしい運命が
天国の門を閉じ、地獄の扉を開く
力への嫌悪はそんなにも恐ろしく
それは生けるものと死者を混合する
天使の心の痛みに別れを告げさせる
邪悪な天使は生贄を要求し
教会の保護から汝を追放し
汝の祈りの声が天国に届きにくくする
腕も手も汝の命に反し
もがき苦しむ汝を助ける者を打つ
最悪、冷酷で、精査するものを拒否する
同じく不熱心な布施が汝の苦悩を救う
汝が生ける時も死せる時も名を挙げ
汝の献身的な頭脳を思考し
汝の暖炉から整形した名誉を引き裂く
それでもなお汝は聖句を棺台に置く
霊場から汝の死骸が蘇り
猟犬に弾き飛ばす腐肉のように
それが悲惨で絶望的な運命
ローマによって布告された冒涜のために

サー・ウォルター・スコット

1521 年　ルターが聖書をドイツ語に翻訳する。ルターは 1545 年に亡くなる。

1530 年―イギリスのヘンリー 8 世はルターに反対したことによって「信仰の守護者」と呼ばれる。ローマ教皇の指示に従わず、彼は妻キャサリンを離婚し愛人と結婚した。彼はローマ教皇によって教会から破門された。スペインとフランス、ドイツの君主は彼の領土を奪うように命じた。これは 1538 年のことだった。彼はイギリス国教会を組織し、ローマ教皇に税を払うのを拒否した。彼は修道院と女子修道院を圧迫し、その領地を国家のものとした。彼は教会の礼拝が人民に分かりやすい

ものとなるように聖書と祈祷書を新たに英語に翻訳することも命じた。彼は国教会の独裁的首長であることを宣言し、これがイギリスの宗教改革である。

1540 年―ロヨラがイエズス会を組織した。この男は軍人だった。彼はパリでザビエル、ライネズと会った。真夜中にこの 3 人は他の 3 人と共に、カトリックの改革と若者の教育、異教徒を改宗させるためにイエズス会を組織した。

1540 年にこの組織は教皇パウルス 3 世によって「イエズス会」として認可された。キリスト騎士団にはカトリックの精神の本質とカトリックの宗教改革に対抗する歴史が凝縮されている。この騎士団は強力な拠点の全てを持ち、説教壇や印刷所、懺悔室や神学校から大衆を支配した。初期のイエズス会士はローマ教会の旗の下に入隊した兵たちの中で、最も忠実で、勇敢、成功を収めた軍人だった。彼らの原理原則は清貧、純潔、ローマ教皇の望みに絶対的に服従することだった。彼らはカトリックを復興させ、カトリックに好意的な反応を引き起こした。

1543 年―コペルニクスの死

1558 年―エリザベス 1 世イギリス女王となる

1577 年―イギリスのドレーク提督がマゼラン海峡、サンフランシスコ、モルッカ諸島、喜望峰を経由して世界 1 周する。

1592 年―フランス、セントバーソロミューの虐殺

1588 年―イギリス、スペイン無敵艦隊を破り、イギリスのプロテスタンティズムの存続を可能にする。

1598 年―ナントの勅令

17 世紀

宗教上の論争から起こった対立は 16 世紀で終わらなかった。プロテスタントはフランスで抑圧されていた。イギリスではプロテスタントの違う教派同士で闘争をしていた。スペインではカトリックがイスラム教を許容しなかった。ドイツでは、宗教の自由が認められる前に、30 年戦争（1618-1648）が行われた。本当に、この時期の全ての出来事は宗教に起因するか、宗教についての問いが混乱したために起こったものだった。アメリカでは共和国の基礎が築かれた。フランス人がカナダに入植定住し、メイン州からジョージア州まではイギリス人とわずかなオランダ人が、メキシコ湾岸にはスペイン人とフラン人が入植定住した。

1598 年　フランス王の発したナントの勅令によって、ユグノーに静穏で乱されることのないない居住地に住む自由と、公共の場での礼拝の自由が認められた。カトリックによる全ての訴追は取り下げられた。プロテスタントの財産と地位は殆どが回復された。これは明らかにフランス文明にとっては良い結果をもたらした。ドイツはまだ宗教紛争が日常的な出来事だったが。

1607 年―バージニアのジェームスタウンにイギリス人が定住植民。

1611 年― 1000000 人のムーア人がスペイン人領主の頑迷と強奪によりスペインから追放される。

この世紀の最も著名な人物はリシュリュー枢機卿である。彼はフランスの外務大臣となり、王の顧問となった。王は枢機卿の批判に動じない意思の強さに圧倒された。彼は貴族たちの存在感を低下させ、中央集権を強化した。カルビン教徒の力を抑制し、勢力の均衡を回復した。オーストリアの力を弱めるためにドイツのプロテスタントに補助金を出した。1635 年にはヨーロッパで最も素晴らしい文芸機関であるフランス学士院を創設し許可した。

1640 年―カナダにモントリオールの町が開かれた。モントリオールは北アメリカにおけるフラ

ンス人とイエズス会の影響力の中心地となった。フランス人はインディアンと獲物の肉、毛皮を交換した。イエズス会士は遠くオハイオ州まで五大湖を牛を連れて渡り、西はミシシッピ川を越えて、アメリカ中央部に肥沃な地域があることを世界に知らしめた。

1645 年―イギリス、ネーズビーの戦いでチャールズ 1 世とその忠誠者がクロムウェルに敗れる。クロムウェルは 17 世紀で 2 番目に偉大な人物で、単純で素朴な郷紳であり、宗教はピューリタン、軍隊では厳格な規律を施し、議会では著名な政治家だった。彼はイギリスの改革者、後には独裁者になった。彼の政府の時イギリスは繁栄し、強力な国家となり、よく統治された。彼の外交方針は見識があり、成功を収めた。彼は王位を拒否した。彼はイギリスコモンウェルスの護国卿として、民間の取るに足らない紳士として死んだ。彼は偉大な将軍であり、今でも偉大な公子である。

1635 年―ロンドン、ペスト流行、10 万人近くが死ぬ。

1666 年―ロンドン、大火にみまわれる。

1682 年―ピョートル大帝がロシアのツアーリとなる。彼はロシアの改革者、国の習慣や制度を刷新した。彼は陸軍を再編し、海軍を創設した。礼拝堂を建てた。ペテルスブルグに科学アカデミーを設立した。

1683 年―ポーランド国王、ヤン・ソビエスキがドイツ皇帝の要請でウィーンまで遠征し、オスマントルコの包囲から解放し、ハンガリーまで撤退させる。ドイツ人はこのことに感謝する心が薄く、すぐにこの解放者を忘れた。ソビエスキは真の愛国者であり、プロの殺し屋、ポーランドの中心人物だった。感謝する心の深いポーランドの国は彼を王にした。

1697 年―ゼンタの戦い、ドイツのプリンツ・オイゲン、この時代の最も偉大な将軍が多数のトルコ人を殺戮してオスマントルコ軍を破る。この戦いが侵略するオスマントルコ軍とイスラム教に対するドイツ人の最後の総力戦だった。

18 世紀

この世紀はヨーロッパ、インド、アメリカでは革命戦争の世紀であった。この世紀は知識と科学に大きな進歩をもたらした。また。北部の主要な国々で紛争が起こり、西洋の征服した国々の栄光を増大させてこの世紀は終わった。この世紀は偉大な将軍、輝かしい政治家、有名な科学者、傑出した作家の時代である。この世紀は人民が既成の秩序や世襲制に反対して立ち上がった二つの大騒動を目撃する。この世紀は人生の熱意、進歩に満ちている。その合言葉は自由、平等、進歩である。この世紀はベンジャミン・フランクリン、ラボアジエ、ローレンツ・シュタイン、マルバラ公、フリードリッヒ大王、ジョージ・ワシントン、ナポレオン・ボナパルトの時代である。フランス革命時に恐怖政治を、アメリカの自由人の闘争を目撃する。

1701 年―ナルバの戦い。スウェーデンのカール 12 世がピョートル大帝を破る。カールにとって戦争は情熱であり、職業のようなものであった。彼は征服する時は野蛮で残酷であったが、勇敢で、穏やかで、寛大でもあった。

1720 年―南海蒸気船会社　ルイジアナ―ミシシッピ蒸気船会社がフランスがルイジアナを占領したことによって創設される。

1740 年―プロシアのフリードリッヒ大王がオーストリアに宣戦を布告し、シレジア（シュレージェン）を奪取する。戦争は彼を夢中にさせる熱情だった。戦争の勝利が彼の最高の栄誉だった。軍事的に領土を拡大することが彼の人生の原理だった。フランスとロシア、スウェーデンは連合してシレジアの奪取に対抗した。これが後に 7 年戦争（1756–1763）に繋がった。イギリスは金を供給

することでプロシアを援助した。フリードリッヒ大王は人民の心、を持ち、強力な軍隊、国庫には金があり、借金はなかった。彼は負ける原因がなかった。連合軍は50万人になり、彼の2万を包囲した。彼はオーストリア軍に向かって進軍し、プラハで敗れた。敗北にひるまず彼はフランス軍に立ち向かい、ロスバッハで破った。次に彼は向きを変えてオーストリア軍と戦い、ロイテンで破った。そして次に彼はロシアに向かい、22000対52000だったがツォンドルフで勝った。これは連合軍が各個撃破された戦いで、こうして2年の戦争は終わった。残りの5年の戦争はロシアが大敗ではないが負け続けた戦いだった。ロシアは厳しく処罰され、人々は困窮した。町は荒廃し、首都は一部が破壊され、軍隊は貧窮に苦しみ、軍服はボロボロで不満が充満した。

ヨーロッパは戦争で疲弊してきた。和平が宣言され、フリードリッヒ大王はシュレージェンを占有した。彼は75年生きた。彼は傑出した人間だった。彼にとっては国家が全てだった。彼は残酷で利己的、吝嗇だった。彼は恐怖に支配され、自分自身を崇拝した。

1579年―フランス領、カナダのケベックがイギリスによって占領される。これによってアメリカ大陸でのフランスの支配が終わる。7年戦争はアメリカで、インドで、ヨーロッパで継続した。

1765年―イギリス議会が印紙法を成立させる。それはアメリカの植民地に、彼らの承認なく、議会に代表を送る権利もないまま、印紙に課税する法律だった。これに対してアメリカでは反乱が起こった。アメリカ人は印紙を使うことを拒否、課税される積み荷の茶を投げ捨て、あるいは本国に送り返した。イギリスは植民地を圧伏し鎮圧するために部隊を送った。

1775年―アメリカ植民地はレキシントンでイギリス部隊と衝突、ボストンまで駆逐した。6月19日、バンカーヒルの戦い起こる。

1776年―7月4日　独立宣言に署名。

1783年―パリ条約によって、イギリスはアメリカが自由で独立した国家であることを認める。

1788年―激しい嵐によって作物が被害を受け、フランスの一部に飢饉が起こる。これがフランス革命の勃発を早めた。ルイ16世とマリーアントワネットは人民が飢餓に苦しんでいるのに贅沢な生活を送っていた。人々は重税に苦しんでいた。貴族と聖職者は無税だった。彼等も人民の状況を無視した。

1789年―フランス革命が始まる。これが起こった原因は、

1．モーペルチュイ、ボルテール、ルソーなど不信心者による著作物
2．人民の権利に関する思想が人民の間に普及したこと、アメリカ独立戦争の成功がフランス革命の蜂起を活気づけ、前進させたこと。
3．重税、加重な労働、食物の欠乏に人民が苦しんでいたこと
4．裁判官、貴族、聖職者が一時的にのぼせ上ったこと。
5．悪化していたフランスの財政状況

1793年―恐怖政治

1794年―ナポレオン・ボナパルトがロンドンを占領。彼は訓令書を遵守し、精鋭軍の将軍となった。彼はジョセフィーヌと結婚し、彼女の持参金の権利によってイタリア軍を指揮する権利を得た。彼はロディの戦い、アルコレの戦い、マントバの戦いの勝利によってフランス軍の栄光を高めた。この世紀はナポレオンのエジプト遠征で幕を閉じる。

1799年―12月14日　アメリカ合衆国初代大統領、ジョージ・ワシントン死す。